

実写ドラマ(学園忍者もの)

30分

## 風魔の小次郎

第二話 「ちいさな友達の巻」

脚本 大岡俊彦

原作 車田正美

「風魔の小次郎」  
(集英社)

## 登場人物

小次郎（16）

風魔忍者。

北条姫子（16）

白鳳学院総長代理。

柳生蘭子（17）

白鳳学院武道指南役。

飛鳥武蔵（17）

誠士館。傭兵忍者。

壬生攻介（17）

誠士館。夜叉一族。今は松葉杖。

夜叉姫（18）

誠士館。夜叉一族の頭領。

飛鳥絵里奈（10）

入院中の女の子。

看護士（22）

夜叉八將軍・陽炎（18）

鉄扇使い。

夜叉八將軍・紫炎（17）

炎使い。

夜叉八將軍・白虎（16）

うつけみ使い。

夜叉八將軍・黒獅子（17）

豪腕の主。

夜叉八將軍・闇鬼（17）

盲目。

夜叉八將軍・雷電（17）

雷使い。

夜叉八將軍・妖水（16）

ヨーヨー使い。

夜叉八將軍・不知火（16）

鉄拳使い。

風魔一族・竜魔（18）

風魔の長兄。隻眼。

風魔一族・劉鵬（18）

風魔の力もち。

風魔一族・項羽（17）

風魔の羽使い。

風魔一族・霧風（16）

風魔の霧使い。

風魔一族・麗羅（15）

風魔の炎使い。

風魔一族・兜丸（17）

風魔の重鎮。

○白鳳学院、校門、校庭

小次郎、鼻歌を歌いながら堂々と校門から入って  
くる。ジロジロ見る生徒たち。

小次郎「とう！」

と、校旗を掲げているポールの上に飛びのる。そ  
の上から校内を観察。

小次郎「グンモーニング白鳳学院の女子。オレかっこいい？イケ  
てる？（へんなポーズ）」

武道部、スポーツ部の朝練。

小次郎「しかし意外とカワイイ子多いね。でもオレの姫子さまに  
は負けるね。おっ！」

総長室の窓（3F）から手を振る姫子。小次郎、  
調子に乗って手を振り返す。と、ぎよつとなる。  
姫子の後ろから蘭子が小刀を投げつける。

小次郎「あぶねっ！」

と、二本指でその小刀を額直前で受け止める。一  
瞬でポールの上から総長室の窓に飛び込んで入る  
小次郎。

○同、総長室

窓枠に立つ小次郎。

小次郎「あつぶねーじゃねえか！あと1ミリで脳に刺さる所だ  
よ！」

蘭子「…ちっ」

小次郎「ちっ、かよ！」

蘭子「（かなり怒っている）私の言いたい事は分るね？バカ小  
次郎」

小次郎、一瞬で消えて、天井の一部がぁいて顔を  
出す。

小次郎「そうバカバカ言うなよ」

姫子「まあ！ 忍者みたい！」

小次郎「（姫子にピースしつつ）忍びは目立つな、というコトだ

ろ？」

姫子「そうですね小次郎。小次郎は派手で目立つから、みんなの注目の的になつてしまいます」

小次郎「(出る) そう？ そうだろ？ スタアのオーラってやつですかね？」

姫子「そうかも知れませんね」

蘭子「ぴよんぴよん飛んでるからだよ！ 風魔の小次郎。今回の指令は野球部の遠征試合の援護だ。次の春の甲子園の予選も兼ねている」

窓の外の風景。野球部。

小次郎「なんだよ男かよ。サポートしがいがねえなあ」

蘭子「姫子さまも同行して応援にいくが」

小次郎「ようし、どいつが白鳳のハンカチ王子だい？ 小次郎さまが甲子園にピクニック気分で連れてってやるぜ！」

蘭子「ゲンキンだなあ」

姫子「うふふ」

○誠士館、総長室

夜叉姫の前で、夜叉八將軍それぞれ名乗る。

陽炎「陽炎」

紫炎「紫炎」

白虎「白虎」

黒獅子「黒獅子」

闇鬼「闇鬼」

雷電「雷電」

妖水「妖水」

不知火「不知火。夜叉八將軍、そろいました」

松葉杖をつく壬生。武蔵。

陽炎「飛鳥武蔵。我々八將軍を召集する事態とは何だ？」

紫炎「この呼び出しに何の意味があるというのだ？」

武蔵「…風の一族が来た」

白虎「！…風魔。風魔一族が？」

壬生「私もこの目で見ってきたよ。風魔一族が、白鳳学院の側に

ついた」

黒獅子「バカナ…！ 風魔だと？」

壬生「五百年の時を越えて…我々夜又と宿敵風魔が再び闘うと

きが来たのだよ、姉上」

夜叉姫「負傷の壬生に代わり…飛鳥武蔵、お前に指揮権を預けま  
す」

ざわつく八將軍、壬生。

武蔵「風魔の小次郎…。夜又一族が全力で叩き潰す！」

○遠征中のバス

バスの上で座ったまま、のほほんと移動中の小次郎。

●タイトル 「風魔の小次郎」

●オープニング

●CM

○タイトル 「第二話 ちいさな友達の巻」

○夢の中（黒バック）

苦しむ絵里奈（10）。強い風が吹いている。

絵里奈「お兄ちゃん…助けて…強い風が来るよ…お兄ちゃんを吹  
き飛ばす、強い強い風が来るよ…！」

○中央病院、病室

看護師「絵里奈ちゃん、絵里奈ちゃん！」

脂汗をかいて起こされる絵里奈。

絵里奈「はっ…！（息、荒い）」

看護師「またうなされてたわよ」

絵里奈「…同じ夢を見ました。…風が来るんです。大きくて強

い、風が来るんです」

シャツとカーテンを開ける看護師。

看護師「外でも見ましよう。ホラ、絵里奈ちゃん外でスポーツしてる人を見るの好きでしょう？ 今日なんか試合があるみたいよ。：野球の試合みたいね」

窓の外を見る絵里奈。隣のグラウンドには、白風のチームが到着。

○中央病院前グラウンド

準備する白風のチームメイト達。

蘭子「じゃ小次郎、今回もよろしく。チームメイトの変装は前回でこりごりだが、なんかやり方はあるのか？」

小次郎「あるよ。オレたちは風の一族。風を見るのはわけないぜ。

：（と、空を見て）あつちに低気圧、こつちとこつちに高気圧。：なので、25分後、ライト方向に吹く風が来る。流し打ちでスタンドに入るね」

蘭子「なるほど。風魔は風を読むのか」

姫子、冷たいおしぼりをみんなに配っている。チームメイトの友達のように。

小次郎「蘭子さあ、ひとつ聞きたいんだけど」

蘭子「なんだ？」

小次郎「オマエなんで姫子ちゃんの下につくわけ？」

蘭子「なんでって：：」

小次郎「オレたちは忍者だからさ、風魔一族は北条家の家来で、何百年も北条家に仕えてきた訳じゃない？ 風魔と北条は表裏一体の家同士だからさ、まあそれで今回オレが派遣されてるんだけど、ぶっちゃけ、柳生家の人だから姫子ちゃんに仕えてる訳？ 蘭子は」

蘭子「柳生家は代々北条家に仕える一族。私の兄も、父も、姫子様のお父様のおそばで働いている。私は女ということもあり、姫子様のお世話をずっとしてきた」

小次郎「ふんふん」

蘭子「：訳でもないがな」

小次郎「ふん？」

蘭子「なんていうかな、私は姫子様が好きなのだ。…あのお人柄だ、少しぼけた所もあるけど、それでも正直だし、誠実だ。自分のやらなければならない事の大きさに胸を痛めてらっしゃる。私力がになれるならなりたい。考えてはいけないことかも知れないけど、多分、姫子様が北条家の人間でなかったとしても私は彼女の力になりたいと思うだろうな」

小次郎「…蘭子、オメエいい奴だな」

蘭子「なんだよやぶから棒に」

小次郎「いや、それを聞いて安心した。…忍びは裏から助けるのが仕事さ。その存在さえ気づかれぬ様に。…ちよつと、風、見てくる」

と、またもボールの上に飛びのる小次郎。

蘭子「なんだよ小次郎の奴…」

○ボールの上

逆立ちしたり、色々と変なポーズで風を読む小次郎。

小次郎「さてとこの地形はつと。…あーこつからあつこに龍脈が通つてて、奇門遁甲三十六計ムニヤムニヤムニヤ…」

(計算中) よしわかった！

○グラウンド

蘭子のケータイにかかってくる。

小次郎(声)「正確にいうぜ。しばらく追い風で、12分後、突

然無風。16分後から5分間逆風なので、フライは捕れる。あと、22分後、ライト方向に大きい風ね」

メモを取らせる蘭子。

小次郎(声)「しかしケータイって便利だね」

蘭子「おまえケータイも知らなかったのかよ」

○ボールの上

小次郎「つたりめえだよ。こちら山里育ちだぜ！ 風魔の里には電波なんて届いてねーっつの！」

蘭子（声）「わかったわかった！そのケータイは支給品だからくれぐれも壊すなよ！」

小次郎「ヘイヘイ。ひと言多いんだよなああのドブス。…ん？」  
向いの病院の窓から、絵里奈が試合を見ている。

○グラウンド

白鳳学院 対 誠士館。

白鳳が打つと、追い風で大きくのびて、外野手が取りこぼす。

○ポールの上

小次郎「オッケーッ！ 早速オレ様の予報大当たり！」

だが、一塁手はタッチプレイの振りをして肘を入れる（夜又の入れ墨がちらりと見える）。

小次郎「あいつ…夜又だ！」

ランナーはめげずに盗塁。しかし二塁手もボールを取るふりをして肘を顔面に入れ、そこに捕手からのボールが直撃（二塁手も夜又の入れ墨）。

小次郎「クソ夜又！ ちゃんと野球やらせてやれよ！」

担架で運ばれるランナー。心配する姫子、蘭子。  
小次郎、風の術。フツと風を吹く。ファーストでのクロスプレー、一塁手がなぜか塁からふわっと浮いてセーフ。一塁手当惑、着地で転ぶ。

次の打球はセカンドライナー。小次郎、風の術でフツと吹くと二塁手の帽子が飛ぶ。慌てた瞬間に打球が顔面を直撃。

小次郎「これでちつとは大人しくなるだろう…待てよ！ 今日の姫子ちゃんはスカート…！」

フツと吹いて応援中の姫子のスカートを狙うが、

前を丁度ガタイのいいキャッチャーが通りマスクが飛ぶ。

小次郎「ちがーう！」

また吹く。今度は蘭子を通り、長いスカートがめくれる。

小次郎「オエーッ！ 見たくねえよオマエのパンツなんてよ！」

またもや蘭子から小刀が額めがけて飛んでくる。

真剣白刃取りする小次郎。

小次郎「あつぶねあぶねっ。アイツ手裏剣の才能あるぜ」

風がまた強くなり、フライが予想以上にのびてポテンヒット。

小次郎「よっしゃ！オレ様の風予報はヨシズミ以上だぜ！」

窓の絵里奈もフライを落したのを見て手を叩いている。ふとボールの上の小次郎に気づく絵里奈。

小次郎「(絵里奈に) 次のボールはレフトに流れるぜ！」

絵里奈「？」

小次郎「(次のボールはレフトに流れる、をゼスチャーで)」

絵里奈「???」

打った白風のボールはレフトに流れ、ヒット。

あっ、と意味に気づく絵里奈。小次郎、ボールの上から病院の窓にジャンプ。

## ○病室

窓枠に立つ小次郎。びっくりする絵里奈。小次郎、

あけてよとゼスチャー。絵里奈、窓の鍵を開ける。

ガラリと窓を開けて入ってくる小次郎。大きくて

強い風が吹き込む。

絵里奈「きゃっ！」

小次郎「どうした？」

絵里奈「強い…大きい風が…！」

小次郎「だーいじょーぶだよ。これからしばらく風は吹かない」

絵里奈「なんで分るの？」

小次郎「指なめてみな、こーやって」

絵里奈 「(マネをしてなめて、一本指を立てる)」

小次郎 「で、こう突き出すと、涼しい方向が風上だ」

絵里奈 「あ。こつちから風が」

小次郎 「これが止むぞ。3、2、1」

絵里奈 「…あっ」

小次郎 「な！？言った通りだろ？無風だ！」

絵里奈 「ホントだ！なんで分るの？」

小次郎 「オレ、風の使者(えっへん)」

絵里奈 「風の使者さんは、どうやってあそこに登ったの？」

小次郎 「どうやって…え、ぴょんって」

絵里奈 「すごいなあ。私ね、体が丈夫じゃないの。お医者様から

運動を禁止されてるの」

小次郎 「だからグラウンドずっと見てたのか」

絵里奈 「うん。体を使って何かするって楽しそう」

小次郎 「楽しいよ。ぴょんぴょん飛び回るのさ。キミ名前は？」

絵里奈 「絵里奈。飛鳥絵里奈」

小次郎 「絵里奈。オレ小次郎」

絵里奈 「名字は？」

小次郎 「えーとね、ないんだ」

絵里奈 「ないの？ウソだあ」

小次郎 「ウソじゃないよ。一族の方針でね、ってもわかんねえか。

それよりさ、あと1分でまた風が吹くぜ」

絵里奈 「どつちに？」

小次郎 「逆に」

外を見る絵里奈。

小次郎 「体、治るのかい？」

絵里奈 「治らないかも、って思ってる」

小次郎 「なんで？」

絵里奈 「みんながきつと治るよ、って言うから。みんながみんな

同じこと言うときは、たいていウソだよね」

小次郎 「絵里奈頭いいな」

絵里奈 「そう？ 小次郎はバカなの？」

小次郎 「うん。…って何言わせんだよ！ あ、ホラ！」

ポールの上の旗が逆方向になびく。

小次郎「思ったより低気圧が速いな。ちよつくら仕事に戻るわ。

絵里奈、ガンバレよ！（と窓枠に立つ）」

絵里奈「小次郎、私とメル友になってよ？」

小次郎「メル友？　メル友って何だ？」

絵里奈「ケータイもってないの？」

小次郎「使い方わかんねえんだよ」

絵里奈「うーん、文通友達って感じかな？」

小次郎「分かった！　じゃあ手紙書くよ！　オレたち友達！（へんなぜスチャー）」

笑う絵里奈。窓から去っていく。

#### ○グラウンド

蘭　子「小次郎！　どこ行ってたんだよ！　風の子報が違うぞ！」

小次郎「わりいわりい！　えっとね…」

#### ○病室

絵里奈の主観。蘭子と話す小次郎。絵里奈に気づいて手を振る。手を振る絵里奈。

ノックの音。振り向く絵里奈、笑顔に。

絵里奈「お兄ちゃん！　来てくれたんだ！」

花束を持った男、武蔵。

武　蔵「絵里奈。今日は調子が良さそうじゃないか？　窓もあけっぱなしで大丈夫か」

絵里奈「うん！　風向きがね、変わったの！」

武　蔵「風向き？…」

#### ● C M

#### ○病院の前、グラウンドの横

既に集結している八將軍。やってくる武蔵。

武蔵「約束の時間にはまだある筈だが…？」

陽炎「たしかめておきたい事がある」

武蔵「なんだ…？」

陽炎「我ら夜叉の忍び108忍、全ては夜叉姫の下に対等な筈だ。それがわざわざ八將軍を集めて貴様が指揮するのは、飛鳥武蔵よ、おまえが夜叉をのつとる為ではないか？」

武蔵「なに？」

紫炎「我々が治めていた地域を放り出してまでここに集まっている、…ということは各地は手薄だ。武蔵よ、お前の指示はいらぬ混乱を招いている。その機に乗じるつもりであらう」

武蔵「そんな小さな策を弄する男に見えるか」

紫炎「見えるさ！ 病弱な妹の治療費を稼ぐために傭兵忍者をやっているお前はな！」

武蔵「なにが言いたい？（木刀に手をかける）」

陽炎「オマエは元々夜叉の人間ではないだろうが！ いつ裏切るか分らんということだ！」

武蔵「では…ここでこの剣に聞いてみるか（木刀を取り出す）」  
壬生が到着。

壬生「武蔵！ ここで仲間割れしてどうする？ 今日集まったのは風魔を倒すためだろう？」

雷電「そうだ！ 我々八將軍対一人の風魔。どれほどの男か早く見せてみる！」

○グラウンド

小次郎、姫子手製の豪華弁当にデレデレしている。

○グラウンドの横

武蔵「…この山猿が…！」

武蔵の目の色が金色に変わる。小次郎、その気配にビクツとなる。武蔵たちに気づいてニヤツ。武蔵、バックスクリーン裏を木刀で指す。小次郎、

うなづく。武蔵達、飛ぶ。

○グラウンド

姫子「小次郎、どうしました？」

小次郎「いや、ちよつと、友達が来たんで相手してきます」

姫子「まあお友達！　どんな方ですか？私にも紹介して下さいよ？」

小次郎「ちよおつとムリかもなあ…ま、そのうちに」

姫子「ぜひ！」

小次郎「(蘭子に) 蘭子！四時かつきり、レフト方向に強い突風。

スライダー投げてもストレートになる位の横風だ！そこを狙え！」

蘭子「わかった！」

○バックスクリーン裏

武蔵、松葉杖の壬生、八將軍が待機。

小次郎「おうおうおうおう！　雁首そろえておでましたな！夜叉のオッサン達！　そんなにこの風魔の小次郎さまが怖いかね！　オイこないだの！　折れた肋骨はつながった

か？」

壬生「…！（神経質に眉をぴくりとさせる）」

武蔵「壬生。今日はオレがやる。いいな？」

長い木刀を構える武蔵。

武蔵「誠士館の飛鳥武蔵。全力を挙げて風魔の小次郎、貴様を倒す」

その気にはじかれるように構える小次郎。

小次郎「なげえー。こんな長い木刀はじめてみたぜ…」

武蔵「どうした？　来んのならこちらからゆくぞ！」

小次郎「ちいーッ」

踏込む小次郎。二、三合ののち、宙に舞う。

小次郎「やった！」

武蔵の脳天を叩き割るイメージ。

小次郎「なにッ!？」

だが武蔵はそこにいない。数メートル遠くにいる。踏込む小次郎。だがまたも一瞬で遠くにいる武蔵。

小次郎「この男…影を踏ませねえ…。あわてるな、目の前の敵は残像だ…一瞬で遠くに行く前にヤツの本体を叩けば…」

攻めてくる武蔵。突きを主体にした連撃。小次郎ははじくだけで精一杯。

○バックスクリーンの表

時計は3時59分。「9回裏」のスコアボードの裏から、武蔵の長刀がつきやぶってくる。

○バックスクリーン裏

ギリギリで突きをかわした小次郎。後ろの壁（9回裏）にささった武蔵の長刀。

小次郎「フウ…フウ…フウ…オマエの木刀、ただ長えだけじゃねえんだな」

武蔵「命を奪うのにここまで時間をかけるとは思わなかった。…出せよ、壬生を傷つけた技」

小次郎「うるせェ!」  
離れる両者。小次郎、風魔烈風。

小次郎「風魔烈風!」  
巻き起こる風。武蔵、その風を青眼の構えで流す。切っ先が風を分けてゆく。踏込んでくる小次郎に、剣先をあわせる武蔵。

武蔵「飛龍覇皇剣!」

武蔵の片手突きが、小次郎の左足を貫通!

小次郎「ぐああッ!（転がる）」

武蔵「さすがだな…本来ならば心の臓を貫いていた筈だが…生かしておけば、いずれ夜叉の邪魔になる。（血染めの長刀を構える）次はびよんびよん飛び跳ねてかわせまい」

○グラウンド

時計がかつきり4時。敵方のピッチャーがスライ  
ダーを投げる。横風の突風が吹いて、棒球になる。

蘭子「来た！ それを狙え！」

○バックスクリーン裏

同じ突風が吹く。

闇鬼「なんだ！？…この風は…！！？」

○グラウンド

打者、ジャストミート。打った打球はホームラン。

「9回裏」の板をブチ破る。

○バックスクリーン裏

そのボールを素手で受け止める男（竜魔）。

竜魔「なんだ小次郎。たかが夜叉一人に苦戦しているのか？」

小次郎「竜魔のあんちゃん！」

武蔵「お、お前達は！」

竜魔「風魔一族」

竜魔の脇には、劉鵬、項羽、霧風、麗羅、兜丸。

竜魔「竜魔」

劉鵬「劉鵬」

項羽「項羽」

霧風「霧風」

麗羅「麗羅」

兜丸「兜丸」

それぞれの得物を構える夜叉八將軍。

項羽「夜叉の忍び…一人怪我人をのぞくと、残りは9人か」

劉鵬「こっちは6人じゃ」

霧風「小次郎を入れて7人だろう？ 数に入れてやれよ」

麗羅「はやくやっちゃおうよ。先手必勝だよ？」

竜魔「まあ待て。(懐から巻き物を取り出す)夜叉の一族。小次郎の援軍として風魔の里から選ばれてきた戦士、全部で8人の名だ」

小次郎「なんだなんだ勝手に出てきやがって！こいつはオレのケンカだぜ！？」

竜魔「赤星の矢で夜叉八將軍が出てきたんだ。もはや小次郎、オマエ一人のケンカじゃない。風魔と夜叉のケンカだ」

項羽「まあ…五百年ぐらい続くケンカだけどね」

陽炎「やるのか！風魔！」

竜魔「古式の作法にのっとり…一人ずつ闘いあう形式ではないか。あと2人遅れてくるが、我ら風魔は計9人、9対9で人数は合う」

壬生「9対9だと？…オレを人数に入れていないな」

松葉杖の壬生、くやしそうに独り言。

竜魔、巻き物を渡す。武蔵、うけとる。

武蔵「風魔の戦士の名…この武蔵、たしかに受け取った」

竜魔「ではあらためて」

再び突風が吹く。

武蔵「う！」

消えている風魔。血染めの木刀に絡まっている

巻物のメンバー表。

### ○グラウンド

ホームランした打者を迎えているチーム。

蘭子「しかし小次郎の言う通りドンピシャだったよ！」

姫子「小次郎が白凰に来て、これで二連勝ですね！」

蘭子「ところで小次郎は？」

姫子「あ、お友達が来たとかで(きよろきよろ)」

蘭子「友達？」

### ○夜、柳生屋敷

布団の中に寝かされた小次郎。風魔たちが周りを囲む。小次郎、蘭子に左足を触られる。

小次郎「いっで！」

蘭子「バカ言ってるんじゃないよ！あの試合中に誠士館の武蔵とやり合ってたってのかい！？」

小次郎「そうだよ名譽の負傷…っていうか、あのまま続けてりや武蔵を一発でブッ倒してた所だぜ？それをとんだ邪魔が入って」

麗羅「邪魔はひどいよ小次郎くん」

兜丸「そうだ。その傷も早く手当てしなければ左足を切断しかねない傷。それほど武蔵の打ち込みは正確だった」

竜魔「(蘭子に)…我々は風魔一族です。風魔総帥の命により、夜叉八將軍を倒す為に馳せ参じました(一同礼)」

蘭子「夜叉八將軍」

霧風「誠士館の側についた夜叉一族の中でも最強の八人。…ことは白鳳学院と誠士館の問題ではなくなってきたのです」

小次郎「ふざけんなよ！こいつはオレのケンカだよ！」

劉鵬「足治してから言え！(と左足を殴る)」

小次郎「いっで！」

○後日、病室

看護師「あら、絵里奈ちゃん今日は風を入れても怖くないの？」

絵里奈「ハイ。…今日は風が気持ちいいの」

と、病院の壁に矢文が届く。

看護師「な、なに！？ 矢！？」

絵里奈「あ…小次郎からだわ。古風なお手紙(笑)」

手紙には、『トモダチのエリナへ』と。

看護師「小次郎って…？」

外を見る絵里奈。

絵里奈「新しい友達なの。風の使者の小次郎さんは…今日はどん

な風を吹かせてるのかな…」  
指をしめらせて、空にかかげる。

『くぐく』

● C M

● エンディング

○ 次回予告

竜 魔『白鳳学院につく風魔一族と、誠士館につく夜叉一族の、  
全面戦争の火ぶたが切って落された…。小次郎の怪我が  
治るまで、まずはこの長兄、独眼竜の竜魔が出る！ 次  
回風魔の小次郎「風魔死鏡剣」に御期待下さい』